

Web掲示板と遠隔TV会議システムを利用した授業実践

—「言い訳」に注目して—

佐野 香織

1. はじめに

本発表は、ヴァッサー大学（米国）とお茶の水女子大学（日本）との間で実施したWeb掲示板とTV会議システムを使用した授業について、学習者の学びのプロセスを中心に報告するものである。

外国語としての日本語教育（JFL）環境における言語学習は、教師からの一方的な「知識獲得」になりがちであるが、実際の社会で必要なものは知識だけではない。学習者自らも、その言語・文化について考え学び創造していく環境を考える必要がある。現在は様々なテクノロジーの発展から、言語と文化を同時に学ぶ環境が整いつつある（佐藤・深井（2008））。こうした環境を利用した学習デザインは、上記のような問題を乗り越えることができるのだろうか。WebリソースやTV会議システムを利用した外国語授業実践例は、数多く報告されている（宮崎2002, 重松ら2008等）。本発表ではテクノロジーの使用に焦点を当てた授業実践報告ではなく、遠隔リソースを用いた授業におけるJFL学習者の学びに注目したいと思う。

まず、ヴァッサー大学におけるWeb掲示板・TV会議システムを使用した授業実践例を紹介し、そこで現れた「言い訳」についての言及「日本人は言い訳をしない」ということから、遠隔リソースを用いたJFL学習者にどのような学びがあったのかについて焦点をあて、考察する。

2. 枠組み

学びのプロセス

1) 経験学習からの視点（Kolb 1984）

- ① 経験（Concrete Experience）
- ② 省察（Reflective Observation）
- ③ 概念化（Abstract Conceptualization）
- ④ 実践（Active Implementation）

2) 日本語教育の協働における「協働のプロセス」

（池田・館岡2007）

「対等」「対話」「創造」+「協働のプロセス」

「互恵性」

3) 「対話のプロセス」(矢部2005)

- ① 「声」を発する

- ② 他者の「声」と向き合う

- ③ 新たな意味を編成する

本発表ではこれらの観点から、次のようなプロセスから学習者の学びを考察する。

- ① 今までの経験をふまえた自分の考えに向き合い、意見を発信する。
- ② 他の人の意見と向き合い、考える。
- ③ 新しい自分の意見を創造する。

3. 実践概要

3-1 授業概要

3-1-1 授業目的

ヴァッサー大学はお茶の水女子大学の協定校であり、夏期に約2ヶ月間の研修をお茶の水女子大学で行っている（詳細は土屋（2008）参照）。本授業は、この夏期研修に参加したヴァッサー大学の学生が今後JFL環境での日本語学習を行っていく中で、継続的な学習のあり方についての探索を目指したものである。授業の目的は、以下の2点である：

- ① JFL学習環境にあるヴァッサー大学の学生と日本のお茶の水女子大学の学生が、Web掲示板・TV会議システムを通じてリアルタイムでコミュニケーションを図り話し合う場を提供する。
- ② 遠隔リソースを使用した話し合いを通して、①自分の考え方を認識する、②お茶大・ヴァッサー大双方の学生の考えを聞く、③ ①、②を批判的にあわせ、再考する。これらにより、今までの自分の考え方に自分なりの新たな考えを構築する。

3-1-2 実施期間

2008年10月～12月の3ヶ月間

3-1-3 対象学生

ヴァッサー大学：中国語・日本語学科 中級レベル
日本語クラス履修者
合計 21名（うち3名は夏期研修に参加していない）

お茶の水女子大学：「日本語学概論Ⅱ」、「グローバル化と日本語教育Ⅰ」履修・聴講の学部生、研究生、大学院生（留

学生を含む)
合計 17名 (Web 掲示板・TV 会議参加者)

3-2 授業実践内容

ヴァッサー大学 (以下ヴァッサー生)・お茶の水女子大学の学生 (以下お茶大生) 双方に、あるコミュニケーションの状況を提示する (例: レストランで水を注文したが人数分には足りない。全員分の水を注文するにはどうするか)。そしてこの状況での表現・コミュニケーション方法について、それぞれ意見・ディスカッションを、Web 掲示板・TV 会議システムで行った。詳しい実施方法については、以下に述べる。

3-2-1 実施方法

授業では、① Web 掲示板を利用して文字での意見投稿・交換を行う、② Web 掲示板での経緯を活かし、テレビ会議システムを利用して直接インターアクションを行う、という大きく 2 つの方法をとった。

1) Web 掲示板を利用した話し合い活動

Talkpoint (以下トークポイント) という Web 掲示板を利用して行う活動である。トークポイントとは、インターネットを通じ示されたある状況について、お互いにどのように対処するかを投稿し、比較・分析を行うことでディスカッションを深めることができる場を Web 掲示板として提供しているサイトである。(詳細は <http://www.talkpoint.org/> を参照)。この掲示板にヴァッサー大生・お茶の水女子大生双方が投稿し、文字での意見交換を行った⁽¹⁾。

2) TV 会議システムを利用した話し合い活動

1) での文字での交流をもとに、TV 会議システムを利用してお茶の水女子大学・ヴァッサー大学を結び、リアルタイムでのディスカッションを行う活動である。

これら 2 つの活動を 1 セットで 1 回として行った (表 1 参照)。TV 会議 3 回のうち、第 1 回目は自己紹介であったため、トークポイントと TV 会議のセットでの活動は実質 2 回である。本発表ではこのうち、第 2 回めのトークポイント「友達との待ち合わせに遅刻」への投稿を経てのクラスでのディスカッションと TV 会議での話し合い活動を通じた、一人のヴァッサー生の学びに注目する。

表 1 トークポイント (TP) の内容と TV 会議の内容

	トークポイント (TP) 設定内容	TV 会議
第 1 回	練習投稿	自己紹介
第 2 回	友達との約束に遅刻	第 2 回 TP 内容
第 3 回	ユースホステルのベッドを取られる	第 3 回 TP および学生 TP について

まずトークポイントでは、「友達との待ち合わせに数分遅刻した場合、あなたは友達になんというか」という Web にあらかじめ設定された話し合いのテーマに対し、まずヴァッサー生・お茶大生それぞれが「自分だったらどのように答えるか」という条件のもと、問いの答えを投稿することからはじめる。投稿するまで他の人の回答を見ることはできない。投稿後、クラスの学生、お茶大生の回答を見ることができ、自らの回答の振り返りや他の人の回答との比較・分析が可能になる。この投稿後、掲示板の内容をもとにクラスでグループディスカッションを行った。そしてディスカッションでの意見・疑問をもとに、お茶大生に対する質問を作成、TV 会議では主にこの質問を中心に話し合いを行った。

3-2-2 データ収集方法

データは自由記述式のアンケート結果を用いた。回答に使用した言語は①・②は日本語、③は英語である。

- ① トークポイントの投稿内容とその理由
- ② トークポイント投稿を経たクラスディスカッション後の学び
- ③ TV 会議での意見交換後の学び

4. 考察

本発表ではこの授業の参加者の一人であるブラウンさん (仮名) に注目する。ブラウンさんに注目する理由は、最初の時点で「日本人は言い訳をしない」という強いステレオタイプの考え方から出発しており、ここからどのような学びが得られたのかを見るためである。

(1) 今までの自分の考えに向き合い、意見を発信する。

ブラウンさんはトークポイント投稿時には「ごめん、待たせちゃって。レストランに行こう!」と投稿している。この表現を使った理由としては、「友達にあやまりたいと思いましたがいいえすぎたいではありませんでした。だから、『ちゃって』と『行こう!』を使いました」(学生の表記のまま転載)としている。そして他のクラスメートとの比較においては「クラス

メートの答えはもっといい」だったが「あやまりたいと思っていることは同じ」だと見ている。お茶大生の答えは「言い訳をしない」から「短くてかんたん」であるとし、また男性の例として参加してもらった20代男性の答え⁽²⁾については「面白い」「日本人は言い訳をしない」が、何もあやまったり言い訳をしないのは「5分ちこくは大きいもんだいではないのであやまらなくてもいいのかもしれない」と述べている

ここで興味深いのはブラウンさん自身の考えとしてまず「日本人は言い訳をしない」ということがあることである。この時点ではなぜブラウンさんがこの考えを持っていたのかが分からなかったがこの理由は次に行ったクラスディスカッションで明らかになった。

(2) 他の人の意見と向き合い、考える。

ディスカッション後、「今日の授業で学んだことがありますか」という問いに対しブラウンさんはまず「女の人のほうが男の人よりいいです」「だんせいだけが使えることばが多いです」と書いている。これは、お茶大生以外の例としてあげた男性の投稿内容（「わりいわりい」「ギリギリセーフ！」など）を指して述べているものと思われる。そして、「言い訳を多く使う」と書いている。投稿時のブラウンさんの考えは「日本人は言い訳をしない」であったが、なぜここに学びの変化があったのだろうか。

この日のディスカッションには、日本人ランゲージフェロー、ランゲージインターン2名にも授業参加してもらった。ブラウンさんがグループで自分達の考えを話し合いをする中で「日本人は言い訳をしない」という考えに対しランゲージフェローが「私は言い訳をする」という意見を主張した。その後「日本人は言い訳をしない」という考え方を持っていたのはブラウンさんだけではなくクラス全員がこの考えを共有していることが分かった。それは1年生時の日本語授業の中でそのような考え方を持つに至った経緯があるようであった。

ディスカッションでのこのランゲージフェローの主張はかなり大きな影響があったと思われる。ブラウンさんは次のTV会議でお茶大生に聞きたい質問として「日本人は言い訳をしないと習いました。少し遅れたら言い訳を使いますか、使いませんか」という質問を用意した。しかしこの理由として「アメリカでは言い訳をよく使いますが、日本はちがうと思います」としていることから、ランゲージフェローの主張よりも未だ授業での知識から「日本人は…である」という考えが強くあると思われる。このことはこの問いに対するお茶大生の答えの予測としても、「いいえ、言い訳を

ぜんぜん使いません」としていることから分かるだろう。またこの時点では「日本人は言い訳をしないと習いました」と自分の意見を発信していることから、お茶大生＝日本人の代表、と考えていることもうかがえる。

(3) 新しい自分の意見を創造する

TV会議後、ブラウンさんの「日本人は言い訳をしない」という考え方はどのように変化したのだろうか。この日のTV会議ではブラウンさんのグループが用意した質問に対し、「私は遅刻したら親しい友達ならそんなに説明も言い訳も言わない」「相手や状況でかなり言い訳をいうときもある」「私はクラスに遅刻した時など、言い訳を言うと悪いイメージを与えと思う」等様々な意見がお茶大生から出た。お茶大生は日本人だけではなく留学生参加者も多くいるため、「日本人は、」という表現ではなく「私は…」という主張も多かった。ブラウンさんは、「TV会議で学んだことはありましたか」という問いに対し、「私は今までいつも『日本人は言い訳を言わない』と思ってきました。でもお茶大生は言い訳をします。言い訳は色々な状況に応じて使います。場合によっては悪いイメージを与えたりするし、言い訳をしないほうがいいこともあるのだと思いました」と答えている。

ブラウンさんは当初持っていた「日本人は言い訳をしない」という自分の考えに他の人とディスカッションすることによって全く異なる意見に出会った。一人の日本人から「私は言い訳をする」という意見を聞いたことにより、今までの自分の考えに再度向き合うことになったといえる。その後、留学生を含むより多くの人々からの意見に向き合い、「色々な答え方がある。場合によって悪いイメージを与えたり、言い訳をしないほうがいい場合もある」という自らの評価基準を創造した、といえるのではないだろうか。

「日本人は言い訳をしない」というブラウンさんの考えは、テキスト・教師から得た知識の一部であると考えられる。しかしこれを単なる知識として終わらせるのではなく、自らの意見・他人の意見に向き合い、そして新たな考え創造するプロセスが重要である。そのために、JFL環境での学習に今回利用したWeb掲示板・TV会議システムといった遠隔リソースを利用することは有効であったのではないかと考えられる。

5. おわりに

本発表では授業実践の一部についてJFL学習者の学びのプロセス事例を中心に見てきた。これらの学びはKolb (1984) の経験学習プロセスにあるように一連のプロセスを継続して行っていくものであると考えるならば、「新しい自分の意見を創造する」ことはすなわち次の「自分の意見に向き合う」ことにつながる。このような継続的なプロセスを夏期研修事前・事後を通して考え学習デザインをするにあたり、Web 掲示板・TV会議システムといった遠隔リソースが有効である可能性も確認できた。

しかしながらこの遠隔リソースを使用した授業実践全体についてはまだ様々な角度から考える必要がある。今後学習者評価等も含め新たに分析直したい。

注

- (1) お茶の水女子大学は女子大学であるため、参加者が女性に限られるという制限が伴う。そのため、トークポイントと同じ内容について20代・30代以上の男性にEメールを使って質問し、得た回答結果を学生に配布した。
- (2) (1) で得た回答のうち、20代男性の回答を指す。

参考文献

- 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房
- 佐藤慎司・深井美由紀 (2008)「日本語教育への社会文化的アプローチ ―初級日本語 ポッドキャストプロジェクト」畑佐由紀子(編)『外国語としての日本語教育 多角的視野に基づく試み』くろしお出版
- 重松淳・國枝孝弘・藁谷郁美 (2008)「遠隔会議システムを利用した外国語授業実践」『2008PCカンファレンス論文集』Web版
<http://www.gakkai-center.jp/pcc/2008/papers/search/index.php>
- ドラージ土屋浩美(2008)「ヴァッサー大学日本語夏期研修：交流を通じた異文化理解」第3回国際日本学コンソーシアム 講演資料 お茶の水女子大学
- 矢部まゆみ(2005)「対話教育としての日本語教育についての考察―(声)を発し、響き合わせるために」『リテラシーズ1』くろしお出版
- 宮崎里司 (2002)「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議システムを利用したインターアクション能力開発プログラム」『講座 日本語教育』第38分冊 pp16-27 早稲田大学日本語研究教育センター編
- Kolb, D(1984) *Experiential Learning: Experience as the resource of Learning and Development*, Englewood Cliffs, NJ, Prentice Hall.

参考サイト

- Talkpoint (トークポイント)
<http://www.talkpoint.org/>